

第2節 資料館における社会教育活動

第10回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－5』を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第10回となる平成22年度の公開授業は、昨年度に引き続き、日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。今回は、埋蔵文化財資料館と山口大学農学部附属農場との共催で、吉田構内の同附属農場で延べ4回行い、小学生5人、教育学部学生6名、一般17名、合計28名の皆様に参加していただいた。以下、授業内容を報告する。

6月19日(土)－田植え－

今回栽培した品種は、昨年と同じ「紅吉兆」(糯米)である。当日は農学部の長砂技術専門職員に代かきをしていただいた水田で田植えを行った。今回は田植えを初めて体験する参加者が多く、足が泥に埋まるため動きづらそうであったが、無事に終了することができた。

8月7日(土)－稲の観察と土器づくり－

猛暑の中、長砂さんから水田に生える雑草についての説明を受け、稲とヒエの違いなどを学習した。この後土器づくりに挑戦し、壺や皿など、参加者各々が古代をイメージした個性的な土器ができた。

10月10日(土)－土器焼成・収穫－

本来は10月3日(土)に開催予定であったが、雨のため1週間延期した。まず、前回つくった土器の焼成を「覆い焼き」で行うため、埋蔵文化財資料館横の空閑地で泥窯づくりに挑戦し、点火した。この後、水田に移動して収穫を行った。最終的に稲は長さ約80～90cmにまで成長した。今回は水田の約半分を模造した石庖丁などを使った穂摘みで収穫し、その後残った稲を鎌を使って根刈りで収穫し、はぜ架けをした。土器の焼成は翌日の午後までかかったが、ほとんど割れることなく焼成することができた。

10月30日(土)－脱穀・粳すり、赤米を食べる－

午前中は箸こぎ、臼と杵による粳すり、てみとザルによる選別とともに足踏み脱穀機による脱穀を体験した。昼食時の赤米の試食にあたっては、今回も土器による炊飯のほか、模造した古墳時代の甑(こしき)と甕(かめ)、竈(かまど)形土器によって赤米を蒸すことに挑戦した。いずれの赤米も歯ごたえがあるものの美味しく甘みがあった。このほか、おかずには鮎の塩焼きや、豚汁、あさりのすまし汁をつくったが、これらも美味しく好評であった。

公開授業を終えて

今回の公開授業は農学部附属農場で3回目の開催となったが、稲の生長や雑草の解説、土器づくりなど埋蔵文化財資料館と農学部附属農場の特色を生かした体験メニューを工夫し、大学ならではの公開授業を実施することができた。参加者からは「体を動かしてみて昔の米作りの大変さが分かった(一般)」、「いろんな道具での稲刈りが楽しかった。来年も来たい(小学生)」などの声が寄せられ、好評であった。

今年度も、参加者には米づくりの歴史や大変さを実際の体験を通して学んでいただくことができ、公開授業の目的を達成することができたと感じている。全4回の公開授業を盛況のうちに無事終了することができたことを館員一同心より御礼申し上げたい。



写真96 副館長挨拶（6月19日）



写真97 縄ない（6月19日）



写真98 苗の説明（6月19日）



写真99 田植え（6月19日）



写真100 稲の説明（8月7日）



写真101 土器づくりの説明（8月7日）



写真102 土器づくり（8月7日）



写真103 稲の状況（9月1日）



写真104 泥窯づくり (10月10日)



写真105 焼成した土器 (10月11日)



写真106 稲の説明 (10月10日)



写真107 穂摘具による収穫 (10月10日)



写真108 はぜ架け (10月10日)



写真109 脱穀・舂すり (10月30日)



写真110 鮎を串に刺す (10月30日)



写真111 食事風景 (10月30日)

2. 『野焼き体験ワークショップ』を共催にて開催

平成19・20年度に続き、平成21年度も地域のNPO法人「子どもとともに山口県の文化を育てる会」の事業に対し当館に共催依頼があり、事業協力を行う予定であったが、同年7月21日に山口県を襲った豪雨災害が影響し、事業は中止となった。翌平成22年度、NPO法人より改めて当館に『野焼き体験ワークショップ～古代人に挑戦～』事業に関し共催依頼があり、共催館として事業協力を行うこととなった。

当事業は①「粘土制作セミナー(作陶)」②「野焼き体験ワークショップ(焼成)」③「作品展・写真展(成果公開)」の3部構成となっており、いずれも当館の協力が必要とのことであった。当館からは筆者と当時教務補佐員であった松浦暢昌氏が講師として参加することとなったが、以下に各取り組みを紹介する。

①「粘土制作セミナー」 平成22年9月11日(土)開催(写真112)

山口市徳地島地に所在する島地保育園にて開催。対象は島地保育園の園児を中心に地域の小児とその家族である。参加者は約50名。当館館員の他、平成17年度に開催した当館公開授業にもご協力いただいた陶芸家の渡邊陽子氏に講師に加わっていただき、渡邊氏の指導の下「粘土と火のであい～どうぶつたちの大ぼうけん～」をテーマに参加者に動物を象った粘土作品を制作してもらった。当館は考古学的要素を付加するため、土器の加飾に用いられた原体(竹、葉、貝殻)などを用意し、制作した粘土作品に思い思いに文様を付けてもらった。子どもたちは終始笑顔で作陶に没頭していたが、子ども以上に熱心な保護者もおり興味深かった。制作された作品は相当な数に及んだが、地元の方の協力により、焼成までの約1ヶ月保管していただけたことも幸運であった。

事業内容とは離れるが、当日筆者の家族の体調が悪く、自身も熱気味であった。松浦氏も体調を悪化させていたが、セミナー終了後帰宅中の車中で妻から「病院の検査で子供達がインフルエンザに感染していた」との連絡を受けた時は慌てふためいた。直ちにNPO法人事務局に連絡を取り、幼稚園に注意喚起をしていただいた。後に参加者に感染者は出なかったと報告を受けたが、帰宅後直ぐに病院で検



写真 112 「粘土制作セミナー」の様相

査を受けた筆者と松浦氏はしっかりと「インフルエンザ感染」の診断を受け、3日間の出勤停止措置を受けた。幸いにも参加者に感染者が出なかったと聞き、胸を撫で下ろしたことを記憶している。

②「野焼き体験ワークショップ」 平成22年10月23日(土)～24日開催(写真113)

山口市徳地島地に所在する、旧島地中学校グラウンドで開催した。1ヶ月以上かけてゆっくりと日陰で乾燥させた粘土作品の焼成を行った。今回も弥生時代の土器焼成方法と推定されている「覆い焼き」にて実施した。ワークショップは粘土制作セミナー参加者と、地域のボランティアスタッフとの共同作業となった。8時30分より作業を開始し、藁を敷き、薪をを組み、作品を据え、藁を被せ、泥を捏ね、泥で覆ういつもの作業。子供は勿論のこと保護者も大はしゃぎ。10時30分頃には無事泥窯5基が完成。子供達は当然のこと大人も泥だらけであった。各窯の点火を終え、ワークショップの初日を終了した。

ここからは窯の管理作業。当館のこれまでの実験成果により、覆い焼きによる焼成は点火から約12時間で最高温(約700℃)に達し、さらに約12時間かけてゆっくりと温度を下げていくことが判明している。つまり丸一日かけての焼成となる。同様の方法で実験している他の研究成果では焼成時間は大幅に短いようであるが、当館で覆い焼き実験を主導している田畑直彦氏によると被覆粘土が厚すぎるのではない



写真 113 「野焼き体験ワークショップ」の様

かとのことであるが、ワークショップ本番で新たな方法に挑むわけにもいかずこれまでの方法を踏襲した。覆い焼きでは火の回りが悪いときには空気を送り込むなどの処置も必要となる。窯内の温度も急激に低下することもあり、想像以上に繊細な温度管理が必要。つまりは「寝ずの番」が必要なのである。館員とNPO法人スタッフ、ボランティアスタッフ、さらには島地保育園園長の応援も仰ぎ、交代で窯の番を行った。折しも夜間に「熊出没注意報」も発表となり、寝るに寝られぬ一夜となった。

夜明けとともに降り出した雨。焼成中に降らなかったことがせめてもの幸運であった。10時30分、雨天にもかかわらず多くの参加者の方々と窯の解体作業を開始。雨天のため解体は筆者と松浦氏で担当した。子供達の真剣な眼差しの下、1基ごと丁寧に解体し、灰を払いのけていくと…様々な表情をした動物達の顔が出現。無事取り上げを終え、1日以上に及ぶワークショップを終了した。

③「作品展・写真展」 平成22年10月31日(日)～11月13日(土)(写真114)

事業の最後は成果展。山口市徳地地域交流センターロビーにて開催した。当事業にて制作した作品の他、地域団体の陶芸作品等様々な作品が出展された。当館も覆い焼き泥窯のミニチュア模型を出展予定であると同時に写真展のための作品の選定、プリントアウト等作業を進めていたが、時間的な余裕がなく、当時開催準備を行っていた山口県大学博物館連携事業の梅光学院大学博物館会場展示設営終了後、踵を返し山口市徳地地域交流センターに向かい、展示物を設置したことを記憶している。開催期間中展示会場を訪れることはできなかったが、好評のうちに終了したとNPO法人からは報告を受けている。

本事業中、セミナーとワークショップに関しては当館が積極的関与を行い、多くの成果を上げることができたと感じる。成果展に関して述べれば、当初より当館の関与は形として残るものではなく、参加者が体験学習を通じて何かを感じ取ってくれればと考えていた。当時園児だった子供達は小学生となっているはずである。将来本学で大学生となった彼らと再会できることを願っている。

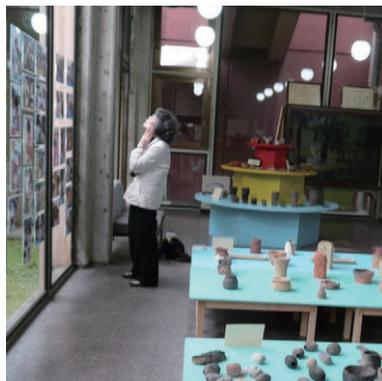


写真 114 「作品展・写真展」の様様